

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## ピアレビュー方式の協同的な推敲活動における筆名 使用についての調査研究

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2024-02-28<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 深谷, 優子, Fukaya, Yuko<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.57529/0002000115">https://doi.org/10.57529/0002000115</a>                                 |

# ピアレビュー方式の協同的な 推敲活動における筆名使用に ついての調査研究

深谷優子

近年、学校の授業をはじめとした教授・学習場面において、アクティブラーニング／主体的・対話的な活動として、ピア（peer、クラスメイトなど仲間）との協同的な活動が導入されることも多い。とりわけ、読解や作文を題材とした協同的な活動の実践や研究は、従来から多く報告されている（e.g., Palinscar & Brown, 1984 ; Falchikov & Goldfinch, 2000 ; Patchan, Schunn, & Correnti, 2016）。これは、読解や作文のように言語の表現を理解し産出する営みが重要であると同時に、困難を感じている学習者の存在があるからだと推察される。本稿では、教授・学習場面における読解や作文における困難の所在とそれが協同的な活動を通じて緩和ないし解消しうる可能性について検討する。

## 読解・作文における困難の所在

読解することにより、読み手はその文章の理解、すなわち記憶表象を心的に構築するが、その心的表象が共鳴過程に基づく表層的な言語表現の記憶であるか、それとも描写されている内容・状況について整合性を保った状況モデルの理解であるかは、読み手／場合により水準が異なるとされる（Cf, 井関, 2019）。「共鳴過程」のように受動的にも見える読解による記憶表象を超えて、その文章の状況モデルを心的に構築するには、読み手が（再）活性化した知識や情報を意図的に統合したり評価したりすることが求められるものの、こうした作業の達成は、意図的な統合・評価を行えるだけの知識や情報と読み手経験によって支えられる熟達の程度による違いが大きいと考えられる。

作文においては、特に推敲の段階において熟達による個人差が多く報告されている。熟達した書き手はそうでない書き手と比べて、推敲での修正の量が多くその質も表層的な修正だけでなく意味に関わる変化も多く、結果として修正された最終稿の質の向上も大きい。それは、熟達した読み手としての眼差しで文章を推敲することができるからだと考えられる（Cf, Flower, et al., 1986 ; Hayes &



をもっており (Cf., 深谷・市川, 2020a)、それが参加者に実感されやすい環境であることが重要であり、リアルなピアの存在がアクチュアルなコメントの真正性を担保していた。

### 協同的な活動における参加者の懸念や不安

協同的な推敲活動を行うにあたり、しかしながら、ピアとの関係性悪化を懸念し不安になる参加者が一定多数いること、そして活動での筆名使用によりその懸念や不安が緩和されるという報告がある。「ピアの存在が明示的でありつつ適度な心理的距離を保つことが可能となっている (深谷・市川, 2017)」ものの、どのような筆名が有用なのかについての詳細はまだ明らかとなっていない。例えば、参加者が任意の筆名を自分で考案して用いる場合、そこには個人の嗜好や関心などの情報が含まれやすく、この特徴はその筆名の印象深さ (識別性の高さ) と、どの個人であるかの特定しやすさ (匿名性の低さ) ともなりうる。個人の特定しやすさ／特定されやすさという匿名性、いわゆる「身バレ」についてはやはり気にする参加者も一定数おり、「指定される筆名のほうがより安心できる」という意見が見られた (深谷・市川, 2020b)。一方、「筆名は自分で選択したい」のように自分で決定することを重視したり、「数字 (番号) の筆名はイヤ」という意見のように、筆名に印象深さ (識別性の高さ) を求めたりする声もあった。さらには、筆名を用いることで実名でない／匿名であるために作文やコメントがいい加減になったり攻撃的になったりするのではないかという懸念を抱く参加者もあり (深谷・市川, 2021)、筆名に関しては検討すべき事項が多く存在する。

以上を踏まえると、協同的な活動でのピアとの関係性への不安や懸念を抑制するには匿名性をどの程度感じられればよいのか、同時に参加者の意欲や熱意を削がないような識別性の確保はどのように可能なのかを明らかにすることは、協同的な活動への十全な参加の前提となるものであり、喫緊の課題であると考えられる。そこで本研究では、ピアレビュー方式の協同推敲活動に参加した経験のある大学生を対象として、筆名を用いることのメリットと起こりうるデメリットを最適にする条件について明らかにすることを本研究の目的とし、授業で実際に筆名を使用したピアレビュー活動に従事した対象者に対して、筆名使用での活動の実態について調査する。今回の条件での筆名での作文及びコメント作業が実名と比してどうであったか、筆名の識別性 (認識しやすさ、印象への残りやすさ) と匿名性 (特定されやすさ、身バレしやすさ) をどう評価しているのか、今後使いたい筆名についてなどを明らかにし、過度に不安や懸念を感じることはない筆名その他の条件について検討する。

## 方 法

### 調査対象

筆名を用いたうえでのピアレビュー形式の協同的な推敲活動を取り入れた授業の受講経験のある学生を対象とした。具体的には、関東地方の私立大学Aの学部生対象に開講されている「課題探究セミナー」の受講者に対し、調査協力依頼等の説明をし、その後同意が得られ、かつ同意撤回しなかった54名を分析の対象とした。

### 調査時期

2021年12月

### 調査内容

**1筆名での活動に対する評価** 「課題探究セミナー」の授業では、ピアレビュー形式の協同推敲活動をする際に筆名を用いてお互いの作文を読みコメントを作成した。ここでは、実名で同様の作文やコメントをする場合と比較するかたちで項目評定をさせた（作文について5項目、コメント作業について6項目、いずれも6段階評定（6とてもあてはまる～1まったくあてはまらない））。

**2筆名でのピアについて** 1) 筆名の特徴から、それが誰か特定できた（いわゆる「身バレ」した）ピアがいたか、2) 作文・コメントの内容から特定できたピアがいたか、3) 作文やコメント活動を通じて興味をもったピアはいたか、についていずれも2件法（1いた、0いない）及び自由記述にて回答させた。

**3筆名での自分について** 1) 自分の筆名の匿名性の見積もり（「自分の筆名は「身バレ」しそうと思うか」、6とてもそう思う～1まったくそう思わない）、2) ピアに自分が特定された場合の懸念（「ピアに「身バレ」したら気になるか」、6とても気になる～1まったく気にならない）、いずれも6段階で評定させた。

**4各種筆名の識別性と匿名性の評価** 今回の授業では用いられていない筆名の一覧を提示して、その識別性（認識しやすさ・印象への残りやすさ）と匿名性（特定されやすさ・身バレしやすさ）を評定させた。筆名として、数字のみの筆名（「515」など3例）、名詞の筆名（「猫キツネ」など3例）、数字と名詞の筆名（「4747うどん」など3例）を用いた。また、今回の対象者が受講した授業では、「色名」を制約とした筆名（「色名を含む任意の単語」と教示した）を用いたため、同じく色名というテーマでの制約がある筆名（例、「青ずきん」）を加え、各3例ずつ計12例の筆名をそれぞれ6段階で評定させた（6とても印象に残る～1まったく印象に残らない、6とても身バレしそう～1まったく身バレしなさそう）。

**5今後使いたい筆名の種類** 6種類の筆名（割り当てられた数字、割り当てられた名詞、自分で考えた数字、自分で考えた数字と名詞、自分で考えた名詞、今回の授業のような制約のもとで自分で考えた筆名）について、今後その種類の筆名をどのくらい使いたいと思うかを6段階で評定させた（6とても使いたい～1全然使いたくない）。

## 手続

3セッションのピアレビュー活動を含む授業終了後に、インターネット上で各自回答させた。1) 筆名での活動に対する評価：課題作成（作文）について、「今回、実名でなく筆名だったことで自分の課題作成（作文）やコメントした内容に違いがあったと思いますか。筆名での課題作成（作文）について、実名での場合との比較で回答してください」と教示し、回答させた。コメント作業については、上の教示での「課題作成（作文）」を「コメント作業」に置き換えて教示し回答させた。2) 筆名でのピアについて：ピアの特定ができたかについて、「今回のピアレビュー活動で、筆名の特徴から、その筆名の人が誰なのか推測できたピアはいますか。どういう特徴かも教えてください」と筆名による特定について、「今回のピアレビュー活動で、作文やコメントの内容から、その筆名の人が誰なのか推測できたピアはいますか。どういうところからわかりましたか」と作文やコメント内容からの特定について回答させた。また、「今回のピアレビュー活動で、作文やコメントの内容から、興味をもった（もっと知りたいと思った）筆名の人いますか。どこに興味を持ったのかも教えてください」とについても回答させた。3) 筆名での自分について：自分が特定される状況だったと思うかについて、「今回の自分の筆名は、特定されやすかった／身バレしやすかったと思いますか」と教示し回答させた。「もしも筆名や作文・コメントからピアに特定された／身バレした場合、あなたはどのくらい気になりますか」とについても回答させた。4) 筆名の識別性と匿名性の評価：4種類の筆名についてそれぞれ3例計12例記載されている筆名一覧を提示し「以下に筆名一覧があります。あなたにとって、それぞれどのくらい印象に残る（覚えやすい、認識しやすい）でしょうか」と教示し回答させた（筆名の識別性）。次に同じ一覧を提示したうえで「以下の筆名一覧で、それぞれどのくらい身バレしそう（個人が特定されそう）と思いますか」と教示し回答させた（筆名の匿名性）。5) 今後使いたい筆名の種類：「今後、同様の協同的な活動をするとしたら、あなたは以下の筆名をどのくらい使いたいですか」と教示し6種類の筆名について回答させた。

## 倫理的配慮

本研究は東北大学大学院教育学研究科研究倫理審査委員会の審査と承認を経て行われた（承認ID21-1-044）。調査対象者に対し、調査研究の目的、内容・方法、

参加に伴うリスク及びベネフィットの有無、所要時間、参加辞退の保証及び参加辞退による不利益がないこと、個人情報の保護（研究結果の公表を含む）などを説明し、同意が得られた／同意を撤回していない者の回答のみを対象とした。

## 結果と考察

### 1筆名での作文及びコメント活動に対する評価（実名と比較して）

対象者が授業で経験した、筆名でのピアレビュー活動についての実名参加の場合と比較した上での課題作成（作文）及びコメント活動について、6段階で評定させた（それぞれTable1、Table2）。

Table1

筆名を使った作文についての評価

|   | 項目                           | 平均 ± 標準偏差     |
|---|------------------------------|---------------|
| 1 | 書きやすかった                      | 5.130 ± 0.912 |
| 2 | 読み手（ピア）にどう思われるか、あまり心配にならなかった | 4.759 ± 1.317 |
| 3 | 緊張しなかった                      | 4.741 ± 1.403 |
| 4 | 不安を感じなかった                    | 4.574 ± 1.474 |
| 5 | 実名だと書けない内容を書けた               | 4.370 ± 1.533 |

Table1筆名での課題作成（作文）についての評価は、いずれの項目も6段階評定で平均4以上であった。「1 書きやすかった」については天井効果を示すほどであり、対象者は課題作成（作文）にあたり、実名で行うよりも緊張せず、また心配や不安を感じにくかった様子が示された。

Table2  
筆名を使ったコメント活動についての評価

|   | 項目                                    | 平均 ± 標準偏差     |
|---|---------------------------------------|---------------|
| 1 | コメントしやすかった                            | 5.278 ± 1.036 |
| 2 | 読み手（ピア）と気まずくなってしまう可能性をあまり気にせずにコメントできた | 5.019 ± 1.107 |
| 3 | 緊張しなかった                               | 4.704 ± 1.396 |
| 4 | 不安を感じなかった                             | 4.741 ± 1.320 |
| 5 | 正直、コメントの手を抜いてしまった                     | 2.500 ± 1.514 |
| 6 | 実名のときよりも、コメントが攻撃的になってしまったかもしれない       | 2.444 ± 1.513 |

Table2筆名でのコメント活動についてもTable1と同様の傾向がみられ、「1コメントしやすかった」「2読み手（ピア）と気まずくなってしまう可能性をあまり気にせずにコメントできた」の両項目は6段階評定での平均が5以上で天井効果を示すなど、参加者は緊張や不安を感じにくかったようである。

また、これまでの一連の研究知見より、筆名でコメントすることへの懸念として、「手を抜いてしまうのでは」「より攻撃的になるのではないか」が指摘されていたが、該当する「5正直、コメントの手を抜いてしまった」「6実名のときよりも、コメントが攻撃的になってしまったかもしれない」はいずれも平均は3以下、すなわち「あてはまらない」よりであった。ただし、今回対象者が参加したピアレビューでは、いずれも同一クラス内（対面授業であり、物理的に同じ時間と空間にて行っていた）活動であったため、こうした手抜きや攻撃性が抑制されたのかもしれない。

## 2筆名でのピアについて

実際に協同推敲活動を行ってみて、筆名そのものや実際の活動を通じて、参加したピアの身バレ、すなわち誰がどの筆名を用いているのかがわかってしまったと回答した参加者は54名中34名であり、6割を超えていた。なお、筆名そのものの特徴でわかった参加者は54名中18名、作文やコメント内容で分かった参加者は54名中27名、まったくピアと筆名とが一致しなかった参加者が54名中20名であった。筆名が特定できた（と考える）対象者が多いように思えるが、これは同一クラス内でピアレビュー活動を完結させた（ピアは全員同じ授業受講者であった）ことが一因であろう。すなわち、時間割の都合上、同じ学科の学生や友人が受講していたため、彼らについての知識があるために筆名や内容から特定しやすかったと考えられる。

また、「作文やコメントの中身からピアに興味をもった」のは、32名で約6割であった。自由記述からは、内容からピアに興味をもった場合と、文章の構成や言葉遣い、コメントの的確さを評価し、それゆえ興味をもった場合とに分かれた。

前者の例だと、似た趣味嗜好のピアに対する興味「まさか共通の趣味を作文にする方がいるとは思わなかったため、もっと知りたいと思いました」、自分にとって新奇な内容を語ったピアへの興味「家電収集を趣味にしている人、どうしてそこまで好きになれるのか興味を持った」「紺色のインベスター 卒業した後に起業するという、周りとは違う夢を持っていたため」、などが理由として挙げられていた。

後者の例だと、文章構成や言葉遣い、コメントの的確さなどによるピアへの興味「桃の祭さん 文章の構成がとても上手でとても読みやすく、自分じゃ書けないと感服させられたから」「ダーツの人、文章を書くのが本当に上手で引き込まれました」などが挙げられていた。

ピアが誰か特定することと、ピアの書いた作文やコメントからのピアに対する興味との関連について、ピア特定の理由ごとに検討した (Table3a筆名による特定、Table3b作文・コメント内容からの特定、Table3c筆名及び作文・コメント内容からの特定の合算)。

Table3a

推測できたピアの有無とピアへの興味 (筆名から)

|             |     | 作文から興味をもったピア |    |
|-------------|-----|--------------|----|
|             |     | いない          | いた |
| 筆名から推測できたピア | いない | 15           | 21 |
|             | いた  | 7            | 11 |

Table3b

推測できたピアの有無とピアへの興味 (作文・コメントから)

|                 |     | 作文から興味をもったピア |    |
|-----------------|-----|--------------|----|
|                 |     | いない          | いた |
| 作文コメントから推測できたピア | いない | 12           | 15 |
|                 | いた  | 10           | 17 |

Table3c  
 推測できたピアの有無とピアへの興味（合算）

|         |     | 作文から興味をもったピア |    |
|---------|-----|--------------|----|
|         |     | いない          | いた |
| 推測できたピア | いない | 11           | 9  |
|         | いた  | 11           | 23 |

なお、Fisherの直接確率検定を行ったが、いずれも有意ではなかった。したがって、筆名を用いたにもかかわらずピアが特定された場合でも、あるいは筆名のまま特定できない場合でも、ピアの書いた作文を読んだ際に抱くピアに対する興味が異なるとは、今回の結果からは言えない。

### 3筆名での自分について

筆名により、ピアに自分が誰かを特定されやすいかどうかの見積もりと、特定された場合の心情について回答分布と平均を調べた（それぞれFigure2、Figure3）。

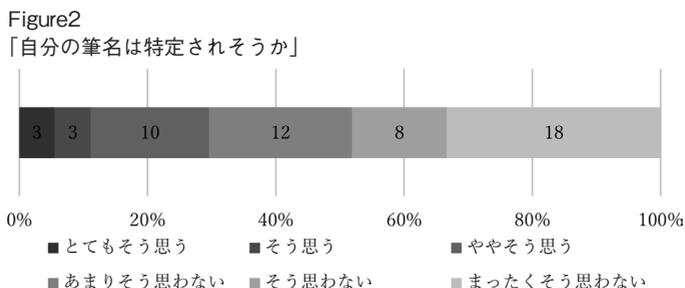


Figure2に示されているように、自分の筆名の匿名性の見積もりである「自分の筆名は特定されそうか（身バレしそうか）」という問いへは回答分布では「そう思う」（6とてもそう思う～4ややそう思う、までの合算）層が16名であり、「そう思わない」層が約7割を占めており、この回答を点が低いほど匿名性を高く見積もる得点となるように反転させて計算すると、6段階評定で平均3.352（標準偏

差1.519) となる。これは、前節での筆名からピアを推測できたと考える対象者が54名中18名、1/3であったという結果にもほぼ沿うものと解釈できよう。

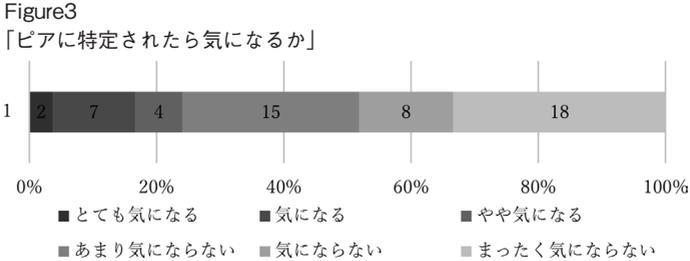


Figure3「ピアに自分が特定されたら気になるか」という問いへは6段階評定で平均2.630 (標準偏差1.521)、回答分布では「気になる」(6とても気になる～4やや気になる、までの合算)層が13名であり、そうでない「気にならない」層が8割弱を占めていた。ただし、実際に自分が誰かを特定されても(身バレしても)構わないからなのか、自分の匿名性を高く見積もっている、あるいは過信している故の結果なのかは、今回の結果からは判断し難い。

#### 4筆名の識別性及び匿名性の評価

4種類各3例の筆名一覧を提示して、その識別性(印象深さ)及び匿名性(特定されにくさ/身バレしにくさ)について回答させた(Table4)。

Table4  
筆名の識別性及び匿名性の評価

| 筆名の種類**    | 識別性   |         | 匿名性*  |         |
|------------|-------|---------|-------|---------|
|            | 平均    | ± 標準偏差  | 平均    | ± 標準偏差  |
| 数字の筆名      | 2.963 | ± 1.104 | 4.142 | ± 0.940 |
| 名詞の筆名      | 3.858 | ± 1.009 | 3.346 | ± 0.976 |
| 数字と名詞の筆名   | 2.833 | ± 1.108 | 3.327 | ± 1.156 |
| テーマの制約ある筆名 | 3.883 | ± 1.088 | 3.272 | ± 0.980 |

\*得られた回答を反転させ計算し、点の高低は匿名性の高低の評価を意味する。

\*\*いずれの筆名も3例提示しその結果を平均している。

それぞれ1要因被験者内分散分析を行ったところ、識別性の評価において筆名の種類の主効果が見られたため ( $F(3, 159) = 20.508, p < .001$ )、平均の差の検定 (Bonferroni法) をしたところ「テーマの制約のある筆名」「名詞の筆名」が、「数字の筆名」「数字と名詞の筆名」よりも有意に高く、名詞が入っている筆名のほうが印象に残りやすいという評価であった。匿名性の評価についても筆名の種類の主効果があり ( $F(3, 159) = 13.494, p < .001$ )、平均の差の検定 (Bonferroni法) では「数字の筆名」がそれ以外の種類の筆名よりも有意に高かった。ただし、6段階評定でも平均は3.5未満であり、極端に個人が特定されやすいと感じているわけではないと推察される。

### 5今後協同的な活動にて使いたい筆名の種類

今後同様の協同的な活動で筆名を使うとしたら、どのような種類の筆名を希望するかを6段階評定で回答させた (Table5)。

Table5  
今後同様の協同的な活動で使いたい筆名

| 項目                   | 平均    | ± | 標準偏差  |
|----------------------|-------|---|-------|
| 割り当てられた数字の筆名         | 2.667 | ± | 1.427 |
| 割り当てられた名詞の筆名         | 2.796 | ± | 1.459 |
| 自分で考えた数字の筆名          | 2.833 | ± | 1.342 |
| 自分で考えた数字と名詞の筆名       | 2.963 | ± | 1.479 |
| 自分で考えた名詞の筆名          | 4.111 | ± | 1.436 |
| 特定のテーマの制約のもと自分で考えた筆名 | 4.481 | ± | 1.285 |

1要因被験者内分散分析の結果、筆名の種類の主効果が有意であり ( $F(5, 265) = 20.885, p < .001$ )、平均の差の検定 (Bonferroni法) では「特定のテーマの制約のもと自分で考えた筆名」「自分で考えた名詞」の2種類が、その他4種類 (「自分で考えた数字」「自分で考えた数字と名詞」「割り当てられた名詞使いたい」「割り当てられた数字使いたい」) よりも好まれていた。この結果からは、自分で考案あるいは決定する余地があり、かつ数字が含まれていない筆名を使いたいと考えている対象者が多かったと考えられる。

## 討 論

本研究は、協同的な活動への十全な参加を保障する条件として、協同的な活動におけるピアとの関係性への不安や懸念を抑制する匿名性とはどのようなものであるのか、同時に参加者の意欲や熱意を削がないような識別性の確保はどのように可能なのかを明らかにすることを目的として、ピアレビュー方式の協同的な推敲活動に参加した経験のある大学生を対象として、筆名使用の実際について調査を行い検討した。

得られた結果から、筆名を用いて作文したりコメントしたりすることに対しては、先行研究の結果と同様に、実名よりも書きやすい、緊張しない、また心配や不安を感じにくかった様子が示されており (Table1及びTable2)、一定程度その効果が確認されたと言える。筆名でなくても構わない、筆名が特定され身バレしても気にならないという参加者が一定数いるが、しかしそうした参加者であっても実名に固執するのではなく筆名でもよいと考えているという結果も、筆者らの一連の研究でこれまで得られた知見とも合致する。

筆名を用いることで懸念されるデメリットとして想定されていた手抜き、無責任あるいは攻撃的なコメントについては、否定的な回答が多かったことから (Table2)、今回対象者が参加したピアレビューの条件 (特定のテーマによる制約のもと自分で決定した筆名使用での、物理的に時間と空間をピアと共有した活動) においては、こうした手抜きや攻撃性の懸念は低かったと考えられる。

筆名での活動を3セッション行うなかで筆名とピアとが特定できたかについては、誰も特定できなかったとする回答が約3割 (54名中20名)、すなわち筆名や作文・コメントの内容など何らかの手段により特定できたという回答が6割強 (54名中34名) であった (Table3a、Table3b)。過半数の対象者がピアの特定が可能であったと回答しており、比較的多く特定されている (身バレしている) ように思えるが、これそもそも授業受講者内で友人知人が多かったために特定しやすい状況であったと推察される。

ただし、筆名の特徴のみでピアが誰か特定できたとする回答は3割 (54名中18名) であったこと (Table3a)、さらには自分の筆名の特定されやすさ (身バレしやすさ) の見積もりは高くはないことは (Figure2、54名中38名は自分の筆名が特定されやすい/身バレしやすいとは考えていない)、今回の協同的な推敲活動において、筆名によって匿名性が確保されていたと対象者が認識していた証左と言えるであろう。

協同的な活動において自分が誰か、ピアに特定されても (身バレしても) 気にならないと回答した対象者が8割弱いた (Figure3) が、これは一般化可能な結果なのか、それとも今回の対象者のみの結果なのかは、今回の結果からは明らかで

はなく、今後の精査が必要であろう。

筆名の識別性（印象深さ）については、たとえ語呂合わせが使えるとも数字より文字の単語による筆名のほうがその識別性が高く評定されており、匿名性（特定されにくさ）については、相対的には数字の筆名が最も匿名性が高いとされたもののいずれの種類も筆名であっても評定平均が6段階評定で3.5以下と、特定されにくい／身バレしにくいという結果であった（Table4）。この結果から、識別性と匿名性が適度に高い筆名とは、文字による単語の筆名という認識を今回の対象者がもっていたと推察される。

そのうえで、今後同様の活動で用いたい筆名として、テーマの制約がある場合も含めて自分で考案した筆名が相対的に高い評価であったことから、割り当てではなく自分が考えた筆名を使いたい、自分に裁量権があることを重視している様子も示された（Table5）。

今回の調査の対象者の場合、匿名性は数字のみの筆名に劣るものの、識別性が高い文字による筆名を、自分で考案したり決定したりしたうえで用いたいと考えている様子が見取れる。文字による筆名として、完全に任意の筆名である場合と、特定のテーマによる制約を設けたうえで考案させる筆名である場合を想定して調査したが、対象者はいずれであってもほぼ同等に好んでいるという実態を踏まえ、かつ、実際に考案された筆名を見比べてみると制約を設けたほうが筆名の匿名性がやや上がると考えられることから、テーマの制約を設けたうえで、文字の筆名を自分で考案させて用いることが、参加者が匿名性と識別性のメリットを享受しやすい筆名の条件であると言えよう。

なお、協同活動において参加者が感じる懸念や不安は、特定／身バレ以外にもあり、ピアとのやりとり、例えばピアからの評価やコメントについて、それを自分の作文に対してではなく人格に対する批評や批判だと誤って受け止めてしまい、参加者の不安や攻撃性が喚起されてしまうことがある。そうした場合、過度に防衛的になったり攻撃的になったりするために、結果として適切な修正が行えなくなってしまう。このようなピアとのやりとりに付随する不安や懸念を減少ないし解消しうるような介入とはどのようなものか、参加者がより安心できる環境で、そしてより前向きかつ効果的に取り組めるような協同的な推敲活動のプログラムはどうあるべきか、などが今後検討すべき課題である。

## 文 献

- Falchikov, N., & Goldfinch, N. (2000). Student Peer Assessment in Higher Education : A Meta-Analysis Comparing Peer and Teacher Marks. *Review of Educational Research*, 70, 287-322. <https://doi.org/10.3102/00346543070003287>
- Flower, L., Hayes, J., Carey, L., Schriver, K. & Stratman, J. (1986). Detection, Diagnosis, and the

- Strategies of Revision. *College Composition and Communication*, 37, 16-55. <https://doi.org/10.2307/357381>
- FUKAYA, Y. 2003. Effects of Peer-Reviewing in Revising Process of College Students' Writing. *The Joint Workshop of Cognition and Learning through Media-Communication for Advanced e-Learning*, 69-72.
- 深谷 優子 (2009a). 読解における図表を用いた概要作成の効果 読書科学, 52, 15-24. [https://doi.org/10.19011/sor.52.1\\_15](https://doi.org/10.19011/sor.52.1_15)
- 深谷 優子 (2009b). 読解及び作文スキルを向上させるピアレビューを用いた共同推敲 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 57(2), 121-132.
- 深谷 優子 (2015). 省略表現の解釈の変化における他者コメントの役割 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 63(2), 79-88.
- 深谷 優子・市川 洋子 (2017). 協同的な推敲におけるピアについて書き手はどう認識しているのか 東北大学大学院教育学研究科年報, 65(2), 17-29.
- 深谷 優子・市川 洋子 (2019). 継続したピアレビュー方式の協同推敲活動が小論の作成および推敲に対する書き手の思考態度に与える効果 東北大学大学院教育学研究科年報, 67(2), 23-37.
- 深谷 優子・市川 洋子 (2020a). 協同的な推敲におけるピアの実在性の影響 東北大学大学院教育学研究科年報, 68(2), 47-60.
- 深谷 優子・市川 洋子 (2020b). 協同的な推敲活動における筆名の使用が書き手の意欲に与える効果 日本心理学会第84回大会, PP-049, [https://doi.org/10.4992/pacjpa.84.0\\_PP-049](https://doi.org/10.4992/pacjpa.84.0_PP-049).
- 深谷 優子・市川 洋子 (2021). 協同的な推敲活動における筆名の識別性の違いが書き手に与える効果 日本心理学会第85回大会, PP-072, [https://doi.org/10.4992/pacjpa.85.0\\_PP-072](https://doi.org/10.4992/pacjpa.85.0_PP-072).
- Hayes, J. R., & Flower, L. S. (1986). Writing Research and the Writer. *American Psychologist*, 41 (10), 1106-1113. <https://doi.org/10.1037/0003-066X.41.10.1106>
- 井関 龍太 (2019). 文章読解の認知過程 日本読書学会 (編) (pp.87-97) ひつじ書房
- Palinscar, A. S., & Brown, A. L. (1984). Reciprocal Teaching of Comprehension-Fostering and Comprehension-Monitoring Activities. *Cognition and Instruction*, 1, 117-175. [https://doi.org/10.1207/s1532690xci0102\\_1](https://doi.org/10.1207/s1532690xci0102_1)
- Patchan, M. M., Schunn, C. D., & Correnti, R. J. (2016). The nature of Feedback : How Peer Feedback Features Affect Students' Implementation Rate and Quality of Revisions. *Journal of Educational Psychology*, 108, 1098-1120. <https://doi.org/10.1037/edu0000103>

## 付 記

本研究はJSPS科研費 JP20K03356の助成を受けた。